



ヴィジュアル糖尿病臨床のすべて 糖尿病腎症のすべて

荒木 栄一(編集主幹), 古家 大祐(専門編集)

B5 頁 264 2012 年
定価 7,140 円(本体価格 6,800 円+税 5%)
[ISBN978-4-521-73382-1] 中山書店刊

[評者] 今井 圓裕(中山寺いまいクリニック院長)

本書は 2012 年における糖尿病性腎症に関する最高のガイドブックである。

糖尿病性腎症に関する研究・診療を長年にわたって行っておられる古家大祐教授による企画・構成のもと、定義・概念、疫学、病態生理、遺伝子解析、病理、診断・治療、さらには現在開発中の薬剤のトピックスまで、糖尿病性腎症の一流の専門家によって最新の情報をもとに記載されているのが本書である。糖尿病診療に携わる医師・研究者にとってわかりやすく書かれた本書は、しばしば治療に難渋する腎症の診療・研究の方向性を明確に示している。

治療管理目標は冒頭の QUICK INDEX にてそれぞれの病期に関してどの時期から介入すべきかが示されており、成因・病態生理の図とともに糖尿病性腎症を俯瞰できる。また、糖尿病に関する疫学研究・臨床研究一覧は Abbreviation を超えて要約された内容を正確に示している。

最初の定義・概念・自然経過の項では、糖尿病性腎症の歴史にも触れられており、微量アルブミン尿、eGFR の登場、さらには慢性腎臓病(CKD)という概念の成立とともに diabetic kidney disease(DKB)という概念が出てきたことが記載されている。これは、純粹の糖尿病性腎症以外に腎硬化症や糖尿病に合併する原発性糸球体腎炎を包括して糖尿病合併 CKD 患者を診療しようとする新しい概念についても記載され、定義を明確にしてある。また、KDIGO によって決定された CKD の重症度分類を日本腎臓学会が日本人用に改訂したものも示され、糖尿病性腎症の病期分類との差についても記載されている。

病態生理の項は、ポリオール経路、DAG-PKC、ヘキソサミン経路、AGE 形成経路、酸化ストレス、

さらには微小炎症、血行動態など最新のデータに基づく解説がなされている。最も臨床で注目されている GLP-1 受容体作動薬、DPP-4 阻害薬に関する腎保護作用が NADPH オキシダーゼ抑制を通じた酸化ストレスを抑制するだけでなく、微小炎症を抑制するものであるという可能性を示すデータは特に興味深い。

本書の中核である糖尿病性腎症治療に関する項目は、大変充実している。これまで、糖尿病性腎症は進行するばかりで治療により抑制することは困難とされてきたが、本書では実際に寛解(remission)した症例を示し、寛解をめざした包括的治療についてさまざまなアプローチの方法が記載されている。腎症の進展阻止には厳格な血糖コントロールに加えて、血圧のコントロールが重要であり、アルドステロン拮抗薬や重曹、L/N 型 Ca 拮抗薬、少量の利尿薬を使い分けるコツが記載されている。食事療法は、糖尿病の血糖管理に必要なカロリー制限に加えて、塩分制限、そしてたんぱく質制限を行うこととなっているが、患者の状態に応じた塩分制限、カロリー制限を中心に考えるようにとの記載は示唆に富む。さらに、集約的治療の項目に、患者、家族への説明に関しても具体的な記載があり、寛解した患者への実例を示しての記載は説得力がある。「あきらめない治療」を続けることは重要である。

さらに病期が進行すると腎心連関から心血管合併症が発症してくる。CKD ステージ G 4(糖尿病性腎症 4 期)になると拡張不全型心不全の合併、動脈石灰化、骨粗鬆症、腎性貧血が合併してくる。糖尿病性腎症の腎性貧血治療に関して目標 Hb 値が 11~13 g/dL を目指すように記載されているが、

TREATをはじめ現在のエビデンスではやや高い印象がある。

最後に記載された腎症のトピックスは、いずれも読みごたえがある内容である。プロレニン受容体、Nrf2, SIRT1, HIF-1, mTORに関する最新の情報が記載されている。いずれもトランスレーショナルリサーチにつながるもので、糖尿病性腎症に対する治療薬となる Nrf2 活性化薬であるバルドキソロ

ンメチル, SIRT1 活性化薬であるレスベラトロール, mTOR 阻害薬ラパマイシンについても開発状況と展望が記載されている。

本書は研修医にとっては糖尿病治療の臨床的技量をあげることができるし、糖尿病専門医, 腎臓専門医にとっても知識の整理になる。ぜひ通読されることをお勧めする。